

下関市綾羅木郷遺跡出土の人骨

松下孝幸

【キーワード】：山口県、弥生時代人骨、頭蓋片

はじめに

下関市綾羅木に所在する綾羅木郷遺跡は弥生時代の集落跡として著名な遺跡である。1956年（昭和31年）に第1次調査が、1965年（昭和40年）には第2次調査がおこなわれ、弥生時代の大型の貯蔵穴（貯蔵用の堅穴）が大量に検出された。1969年（昭和44年）には業者による遺跡破壊がおこなわれるに至り、文部省は急遽、同年国の史跡に指定した。

本遺跡から出土した獣骨の整理中に人骨が含まれていることがわかった。この人骨については、永井らによって、『D地区より人間の後頭骨が検出されている。部分骨であり、年齢・性別等は明らかではないが、内面の一部に火を受けている。』と報告されている。

これまでの調査では綾羅木郷遺跡から墓地は確認されていない。本遺跡に近い梶栗浜遺跡からは多紐細文鏡1面と細形銅剣2本を副葬した箱式石棺が出土し、さらに上坑、石囲墓、土器棺墓が検出されたが、人骨は残存していなかった。

今回報告する人骨は後述しているように後頭骨片が1片にすぎないが、本遺跡から人骨が検出されていたということは、この遺跡のすぐ近くに墓地が営まれていた可能性を示唆しており、人骨出土の意義は大きい。本人骨の所見を記載しておきたい。

資料および所見

今回検出した人骨は、図1に示しているように、後頭骨の一部である。人骨の整理と記載上、人骨番号を「綾羅木郷SK-1」と付けた。骨壁は堅く堅牢であるが、それほど厚いものではない。外後頭隆起部の観察ができたが、この隆起の発達は見られない。また最上項線と下項線の発達もあまりよくない。ラムダ縫合はラムダ付近の観察ができた。ラムダ縫合は内外両板とも開離していたようである。

内面の下方に黒く焦げた部分がある。火を受けたようであるが、骨の状態から、骨になってから火を受けている。獣骨にも火を受けているものがあるので、何らかの理由で獣骨に混入して、火を受けたのかもしれないが、出土状況の詳細が不明なので、これ以上の詮索は不可能である。

この後頭骨の保存状態は良好で、砂丘や貝塚から出土した人骨を思われるほど骨質は堅い。弥生時代人骨と判断しても大過ないように思える。

性別をあえて推測するとすれば、骨壁が男性とするにはやや薄いこと、外後頭隆起の発達がみられないことから、女性の可能性が強い。年齢はラムダ縫合の状態から推測するしかないが、このラムダ縫合は内外両板とも開離していたようなので、壮年と推測しておきたい。

要 約

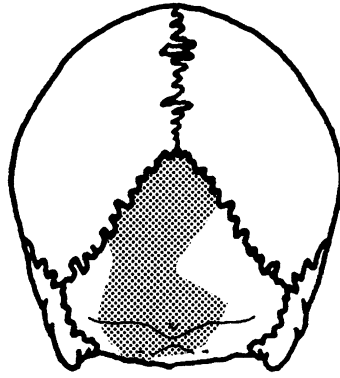
1. 綾羅木郷遺跡から人骨が出土していた。検出されたのは後頭骨片の1片 (SK-1) のみである。
2. 後頭骨の保存状態は良好で、骨壁は堅く、堅牢である。骨質からみて新しい時期の人骨ではなく、弥生時代人骨とみなしても大過ないようである。
3. 外後頭隆起の発達はみられない。また、上項線と下項線の発達も悪い。ラムダ縫合は内外両板とも開離していたようである。
4. 以上の所見から本後頭骨は、壮年の女性の後頭骨と推測した。
5. 綾羅木郷遺跡より人骨が出土していることから付近に墓地の存在が推測され、その保存状態は良好であることが予測される。

謝辞

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた下関市考古博物館の皆様へ感謝致します。》

《参考文献》

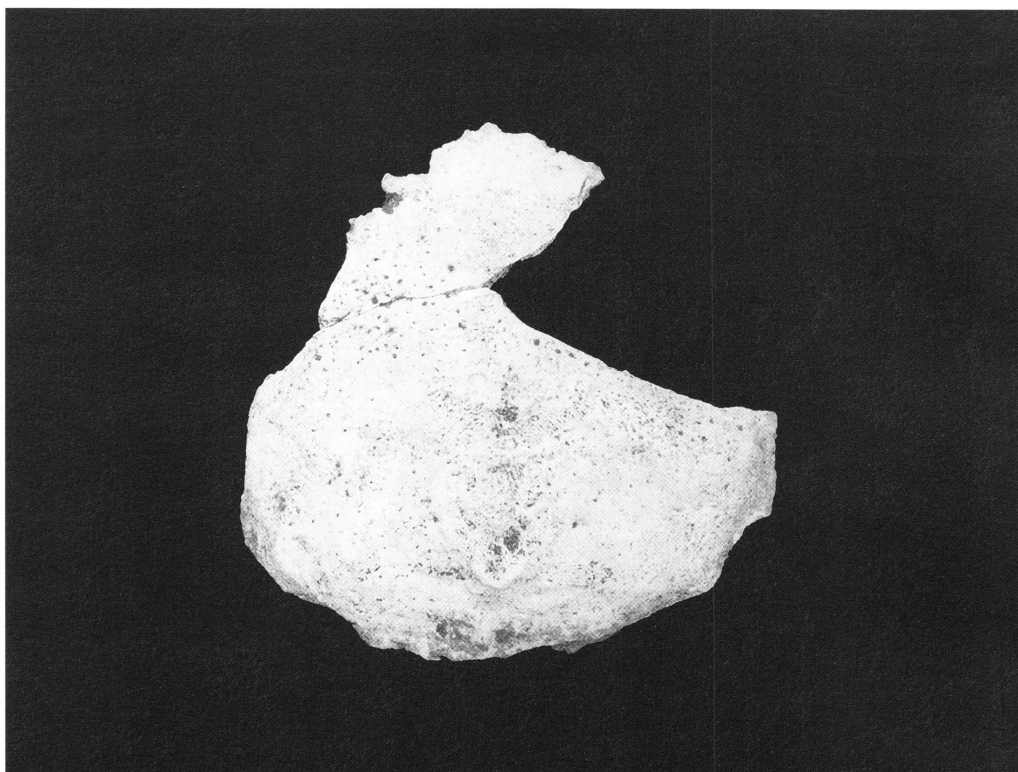
1. 永井昌文・他、1981：綾羅木郷台地遺跡出土の動物遺存体・人骨。綾羅木郷遺跡 発掘調査報告第I集（本文編）490-493.



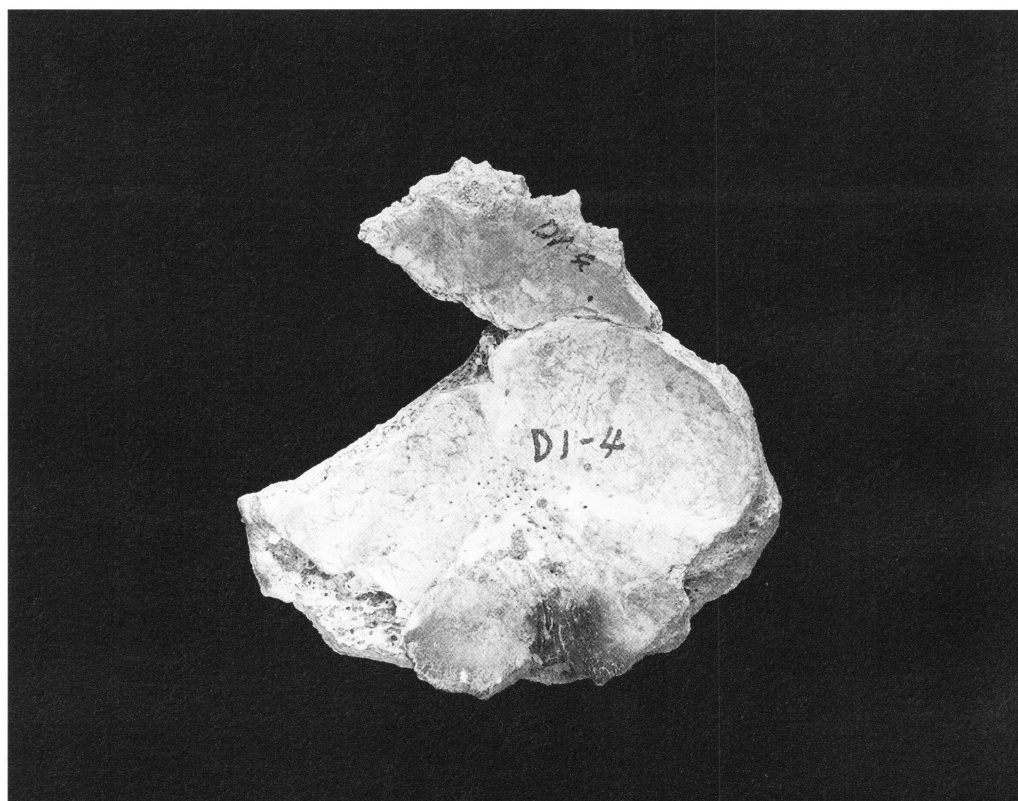
綾羅木郷 SK-1 (女性・壮年)

図1 人骨の残存図 (アミかけ部分)

(Fig.1 Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved)



後頭骨・外面 (The occipital bone)



後頭骨・内面 (The occipital bone)
綾羅木郷 SK-1 (女性・壮年)
(The Ayaragi-go SK-1, young adult female)

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第1号

発行年月日 2006年3月
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8
TEL 0837-88-1841・1842
FAX 0837-88-1843
印刷 アリフク印刷株式会社
〒759-5101 山口県下関市豊北町栗野 4896-8
TEL 0837-85-0311
FAX 0837-85-0312
